

問2

外国人たちが身近に増えている。地方には、日本人側も外国人側もどのようにして共に生きることができるのか試行錯誤した経験があまりないので、困惑している地域もある。しかし、地域社会は確実に「多文化社会」に移行しつつある。「多分化社会に生きる」とはどのようなことだろうか。あなたの考えを800字以内で述べよ。(参考文献に関係なくてもよい)

多様な人々が共に生きる社会の中で、教育を通して、「公正」の概念をはじめとする「自己」「他者」「社会」の在り方を子どもたち(時には大人たち)に伝えていこうという実践があります。それは私が研究している「多文化教育」という分野なのですが、日本の学校の先生からは、「うちには外国人生徒はほとんどいないから必要ない」と言われることがよくあります。そして私はそれを聞いて、ますます「やはり日本には多文化教育が必要だ」と思うのです。

現在でもあまり意識されることはありませんが、実は日本だって、もともと多文化社会です。国籍、民族、言語といった面での多様性も古くからずっと存在していたのに、まるで同質であるかのような意識や言説が強くなりました。

さらに、いわゆる「日本人」「日本語」「日本文化」というものの中身も、地域社会が独自に発展してきた経緯もあり、実に多種多様となっています。そして日本には、そういった地域による文化の違いを「豊かさ」として楽しみ、尊重する風土があると思います。

けれども、どうやら社会には「受け入れられる差異」と「排除される差異」があるようです。「差別」「偏見」「いじめ」「衝突」「すれ違い」...大きな問題から小さな問題まで、「差異」は様々な葛藤を引き起こします。

皆さんは、「多文化共生」や「異文化理解」というキーワードを聞いて、どんなイメージを思い浮かべるでしょうか。英語?外国人?地球?...インターネットで検索をしてみても、地球を囲んで人々が手をつないでいるような画像が目立ちますね。やはり「文化」というと、国、言語、民族などを単位として考えられることが多いようです。そして、多国籍、多言語、多民族といった状況が目に見えて当たり前存在する場では、みんなが「差異」や「共生」について考えさせられます。

しかし、画一的で同質性が高いように見える場では、実際には存在する「差異」が受け入れられず(あるいは理解できず)、摩擦や衝突、差別や偏見が生まれてしまいます。むしろそういう場でこそ、「多文化」について考えてみるのが一層重要なのではないのでしょうか。

どんなに画一的な社会に見えても、本当に「みんな一緒」ということはあり得ません。どんな人も、それぞれにバックグラウンドとなる環境、経験、考えを持って生きています。国籍、言語、民族といった軸はもちろん、世代、ジェンダー、職業、心身の障がい、経済状況、信仰、地域、家庭、教育など、様々な軸が複雑に絡みあって、ひとりの人間ができています。そう考えると、他者はみんな「異文化」だと思いませんか。

アメリカの多文化教育は、人種差別などを背景にして1960年代の公民権運動に端を発し、発展してきました。けれども、多文化教育の本質は、人種に限らず、一人ひとりのアイデンティティを大切にしながら、多様な人々の共生を目指すというものです。つまりそれは、広く「社会の中で、自分をどのように捉え、他者とどう関わって生きていくか」を考え、教えるためのものだと思っています。

つまり「みんな違って、みんないい」というやつなのですが、それだけではありません。「みんな仲良くしましょう」と口にするのはとても簡単です。しかし、それが表面的な「きれいごと」にならないように、実際の仕組みや関わり方を考えていくことこそが何よりも重要なことであり、とても難しいことなのだと思います。「違い」を「問題」ではなく「強さ」「豊かさ」に変えていけるかどうかは、社会の構成員ひとりひとりにかかっています。